

松田正隆

作・演出



シーサイド タウン

Seaside Town

ロームシアター京都
〈レパトリーの創造〉



2021年1月27日|水|-31日|日|
ロームシアター京都 ノースホール

ロームシアター京都
開館5周年記念事業

この国の西の果て、海辺の町。一軒の空き家に一人の男(シンジ)が住みはじめる。シンジは東京で職をなくし行き場を失い、故郷に帰ってきた。荒廃していく地方の町では凡庸なるファシズムが横行し、シンジは戸惑いながらもその流れに馴染んでゆく。相変わらず地縁・血縁のしがらみも絡みつく。日々の生活の中で「何かの兆し」は常に現れ、起こるべくして起こった事件が報告される。

シンジ(帰郷した男)————— 横田僚平
トノヤマ(地元の男)————— 生実 慧
ギイチ(隣の男)————— 鈴鹿通儀
クルミ(隣の女)————— 深澤しほ
ウミ(隣の娘)————— 大門果央
ケンイチ(シンジの兄)————— 田辺泰信

主催者挨拶

本日は、シリーズ「レパトリーの創造」松田正隆作・演出『シーサイドタウン』にご来場いただき、誠にありがとうございます。

この「レパトリーの創造」は、末永く上演される劇場のレパトリー演目を製作することを念頭に、2017年から継続しているプロジェクトです。ロームシアター京都5周年記念事業にも位置付けている今回の第4弾は、長らく京都を拠点に活動を続けてきた劇作家・演出家の松田正隆に、ロームシアター京都の新たなレパトリー作品を委嘱しました。

自身が代表を務めるマレビトの会では、新しい演劇のつくり方を探求し、近年では実験性の強い作品を発表してきた松田が、今回は自身の出身地である長崎をモチーフに、満を持して新作戯曲を書き下ろします。

東京で職をなくし行き場を失い、故郷に帰ってきた一人の男(シンジ)が、一軒の空き家に住みはじめることから物語は始まります。海辺の町を舞台にしたこの物語では、追憶的・牧歌的な癒しの対象としての地方ではなく、現代の日本社会に遍在する排他的な心情や病理が浮かび上がる場所としての地方を描き出します。

さらに、「荒寥とした場所に住まうこと、単にそこに一時暮らすことではなく、その場所独自の慣習、その場所なりの住み方でそこに身を置いてみる」という“住み方”も本作の大きなテーマである」と松田は語ります。それによって、上演空間に俳優と登場

人物が二重写しのように見えてくること、つまりシンジという登場人物が海辺の町に“住む”ことと、俳優たちが上演期間中、劇場にある意味“住む”ということが重なって見えるような、松田の演劇論の実践も本作の見どころとなるでしょう。

また本作品の制作に際しては、オーディションによって選抜された俳優や、若手演出家・福井裕孝の演出助手としての参画、さらに気鋭の演出家・映像作家である村川拓也が記録として参加するなど、新たな才能と出会う場にもなりました。こうした出会いによってクリエーションの場を開くことや、記録という形で上演以外の形で本作を開く試みは、「レパトリーの創造」というプロジェクトにとって欠かすことのできないものであり、後進育成や、若い世代との共同作業にも積極的に取り組む松田とこのプロジェクトを進められたことは劇場にとっても幸運なことでした。

本公演の実現に際してご支援・ご協力賜りました関係各位に感謝を申し上げ、主催者の挨拶といたします。

ロームシアター京都

演劇という出来事と凡庸なるエピソード

松田正隆

好きになった人と初めて喫茶店に行ったとき、コーヒーに砂糖を入れようとしたら砂糖の容器から手元のコーヒーカップまで砂糖の道ができた。スプーンを持つ手が震えたのである。微笑ましいエピソードだが、そのとき、私にとって恋愛とは相手の前での「手のふるえ」だった。手が震えるほどに好きな人に会ったとか、その人こそが運命の人だったとか、そんなことではなく、自分の手がそんなふうに「ふるえる」のをわかっていなかった。それに驚いたのだ。そのような身ぶりや驚きとともに私は恋愛を知ったのである。相手が誰だったというようなことより、予期せず砂糖をのせたスプーンがぎこちなく震えることを知ることこそが恋愛を学ぶことである。

それは一種の暴力の受容である。私から愛された者はそのとき、力を放っていたことになる。それに私は身ぶるいしたのである。それはもはやどうしようもないことだ。そんな無力な者になりさがること。弱者の身ぶりのようにして恋の「ふるえ」は生じるのだ。まるで、ガウンを剥ぎ取られた俳優（ベケットの「カタストロフィ」）のように晒されるのだ。

いやいや、そんな恋のエピソードはこの世にごまんとあるだろう。そんなのよく聞く話じゃないか。だが、それでも、私の「ふるえ」は、それなりの衝撃を持っていたし、その場はそのことを受け流すカップル同士の微笑ましきで時は過ぎていったに違いない。特異な出来事と凡庸なるエピソードが重なっていた。

それにしても、そのようにして学んだ恋愛の「ふるえ」はあらかじめ誰かが教えてくれるようなこと

ではなかった。「ふるえ」を経験してはじめてわかることだった。

おそらく演劇の上演を経験することも、同じようなことだと私は思う。上演の体験を経て、はじめて見出される何かがあるのだ。その何かは、あらかじめ誰かが何かを伝えようとして上演に組み込むことのできるようなことではない。言ってみれば、組み込むことができるのは凡庸なるエピソードのほうであろう。私の恋愛の「ふるえ」の経験はなかなか伝わりはしないが、それは畢竟、微笑ましい恋のエピソードになってうまく伝達されるのだ。その凡庸さに「ふるえ」の特異性は折りたたまれている。

演劇の場面はそのような日常のエピソードによって成り立ち、その場面の連なりによって上演は構成されている。それでは、どこに特異性としての出来事はあるのか。それが分かち難く日常に混ざり込んでいるのなら、それを「ここ」だと「場所」や「時間」を示すようなことはできないだろう。

稽古がすすむにつれて、舞台にいる俳優が見ている景色がわかるようになるときがある。その景色は俳優が演じる役になり、登場人物が見つめる目で見た景色らしいのだが、その景色のイメージが私にも伝わった感じがするのだ。それは、しかし、あくまでも感じがするだけのことなのだった。そうか、そこからは、そんな感じで見えてるんだな、ということにすぎないのである。きっと俳優に「見えている景色」とその景色を見ている俳優を見ている私たちの「その景色のイメージ」がうまくすり合わされることが重要

なのではない。何かを伝えようとする演劇はそんなことが目的になっている。それゆえに上演で扱う情報の信憑性に重きをおきすぎる。あたかも上演において観客に伝えようとする真理（あるいは心理的な感情や感覚）が作り手のほうにあるかのようだ。かと言って、虚構をつくればいいということでもない。虚構のリアルさも情報の信憑性にかかっているのだから。

俳優が見ているもの。それがわかることの喜び。と同時に、私たちはそのときまったく彼ら彼女らから必要とされていないのだ。それがわかったときの失望。そうして私は俳優に嫉妬するにいたる。確かに、愛されるものは常にこことは別のところにいるのだ。そのような突き放しの強度こそが演劇の暴力であり、観客はそれにひるまなくてはならない。恋愛の「ふるえ」にともないよろこびを覚えた私も、相手の裏切りに痛みを覚える日がいつか来ることをわかってもいたのだ。今、ここで、思い返してみればのことなのかもしれないが……。特異な出来事の了解とは、そのようにしてしか訪れはしないのである。



松田 正隆 | まつだ まさたか

劇作家・演出家・マレビトの会代表。

1962年、長崎県生まれ。96年『海と日傘』で岸田國士戯曲賞、97年『月の岬』で読売演劇大賞作品賞、99年『夏の砂の上』で読売文学賞を受賞。2003年「マレビトの会」を結成。主な作品にフェスティバル・トーキョー 2018 参加作品『福島を上演する』など。2012年より立教大学現代心理学部映像身体学科教授。ロームシアター京都「劇場の学校プロジェクト」では二年続けて講師を務めている。

通しについて

福井裕孝

松田さんと初めてお会いしたのは、2017年の全国学生演劇祭で、思えばそのときの会場もロームシアター京都のノースホールだった。そのときのご縁で、同年秋のマレビトの会『福島を上演する』に演出部として参加させていただいた。当時のメモを遡ると、松田さんは稽古のプロセスを大きく〈配置〉→〈修正〉→〈通し〉といったニュアンスで説明されていた。まず戯曲をもとに俳優の基本的な動きや配置を決め、それから稽古を部分的に繰り返して修正を行い、最後に全体の流れで見る。こう文字にするとごくふつうのここのように思えるが、実際その通りで、現場で行われている作業はとてもシンプルである。やるべきことがはっきり決まっているわけではないが、やらなくていいことははっきりしている。今回も基本的にはマレビトの会で実践されてきた手順に基づいて、昨年7月から俳優と稽古を重ねてきた。9月ごろには〈配置〉と〈修正〉の作業を一通り終え、本番に限りなく近い形で〈通し〉をするという段階に入っていた。それから本番までの稽古期間、ほとんど毎日のように〈通し〉をしている。

話が飛ぶが、昔テレビで放送されていた『チーム・バチスタの栄光』というドラマに登場するレストランの光景が今でも心に残っていて、ふとしたときにそれを思い出すことがある。厚労省の役人を演じる仲村トオルが昼間から鉄板の上で焼かれた肉をナイフとフォークで行儀良く食べている。そこに困り顔をした医師役の伊藤淳史がやってきて、吞気に肉を食らっている仲村トオルに呆れながらいくつか会話

を交わす、という場面。ウッド調でアットホームな雰囲気のある店内での二人の掛け合いやシズル感ある肉の描写は、病院という閉鎖空間で展開する本編のドラマの緊張感を束の間忘れさせてくれる。本編の内容は何一つ覚えていないが、なぜかこのレストランの光景は原風景のように心に刻まれていて、ふとしたときにあの店内のあたたかい木の香り、仲村トオルの肉の焼ける音、伊藤淳史の眉間、店主夫婦のやさしい表情、青山テルマのエンディング曲を思い浮かべ、あの光景に帰りたくなることがある。この「帰る」とは、我が家への物理的な「帰宅」ではなく、対象のない精神的な「帰郷」のイメージで、単なる懐かしさとは違った何か不思議なあこがれを抱くのである。

これまでの稽古期間〈通し〉を見てみると、このチーム・バチスタのレストランの光景に対するそれと似たような感情が湧いてきて、帰りたくなることがある。〈通し〉とはその名の通り、途中で中断することなく台本の最初から最後まで通して稽古を行うことを言う。本番直前に本番と同じ上演環境で本番同様進行するものを「ゲネプロ」として一旦区別するなら、〈通し〉はリハーサルと本番の中間的な位置付け、上演のための「仮」の上演と言える。「仮」であるがゆえに、舞台上とそれを見ている自分との距離感がよくわからなくなることがある。〈通し〉の時間は、これまで積み重ねてきた過去のリハーサルの経験とこの先に予定されている本番(の上演)のイメージという二つの方向性によって支えられている。今回、演出

助手という立場で現場に参加しているが、演出を記録した台本や図面を見ながら俳優のセリフや立ち位置を確認しているとき、時計を見ながら〈通し〉のランタイムを記録しているとき、照明の明るさや客席の高さ、本番の上演環境を想定しながら舞台上を見ているとき、それぞれ〈通し〉に対して異なる視線を投げかけている。演じている俳優もそれを外から見ている演出も〈通し〉という現在に対して、いまここにはない過去と未来のイメージを重ね合わせていて、意識は常に複数の次元に跨っている。

マレビトの会の現場では戯曲と上演との対応関係が主な問題になっていたが、今回は個人的にリハーサルと本番との関係について考えながら日々稽古を見ている。それは本番の上演を行うノースホールで長い期間リハーサルを重ねてきたことや、この作品が繰り返し上演されるレパトリーとして制作されていることも無関係ではないと思うが、それ以上に、リハーサルと本番との関係が切り離されること、つまり本番が中止になることを常に想像していたことが影響していると思う。一ヶ月先、一週間先のことも読めない状況の中で、半年先の本番を見通しながらこれまで〈通し〉を繰り返してきた。本番から無情にも切り離され方向を失った〈通し〉は、あのチーム・バチスタのレストランの光景のように永遠に到達することのない経過として宙を彷徨うことになるのだろうか。日々の〈通し〉を見ながら、ふと誰もいないノースホールで亡霊のように〈通し〉が〈通さ〉れ続けている光景を想像して、帰りたくなるのだった。



福井 裕孝 | ふくい ひろたか

1996年生まれ、京都府出身。演出家。人・もの・空間の関係を演劇的な技法を用いて再編し、その場の全体的な状況を異なる複数のスケールとパースペクティブから捉え直す。近年は『モデルルーム』(2018)、『インテリア』(2018, 2020)、『マルチルーム』(2019)など、部屋という空間単位から作品を製作し、上演と屋内環境との再接続を試みる。公益財団法人クマ財団クリエイター奨学金第二期生。2021年度ロームシアター京都×京都芸術センターU35創造支援プログラム“KIPPU”参加アーティストとして、2021年7月にロームシアター京都ノースホールで上演予定。

出演者



生実 慧 | いくざね さとし

1986年、石川県生まれ。近年、出演・参加した作品に、マレピトの会「福島を上演する」(2016-2018)、ワワフラミンゴ「くも行き」(2019)などがある。



鈴鹿 通儀 | すずか みちよし

中学高校時代に日本ハムファイターズの私設応援団として全国の球場を飛び回った結果、大学受験に失敗。2年間に渡るプー太郎生活を過ごしたのち日本大学芸術学部演劇学科に進学。卒業後活動を本格化し、中野成樹＋フランケンズ、ままごと、劇団子供鉅人、ピンク・リパティ、財団、江本純子など舞台を中心に出演。目下の趣味はバックギャモン。



大門 果央 | だいもん かお

京都府出身、大学生、舞台初出演。演技をすることに興味が有り、応募しました。演技未経験ですが、頑張ります。



田辺 泰信 | たなべ やすのぶ

1974年生まれ。1997年から2001年まで劇団維新派に所属。国内及び海外公演に参加した後、心身の探究のため作業療法士免許を取得する。フリーで活動を再開した近年は、「ハッピーアワー」、「れいこいるか」、BROTHER SUN SISTER MOON「I Said」MV、「心の傷を癒やすということ〈劇場版〉」(1月29日公開)などの出演がある。今後は野原位監督の新作が控えている。



深澤 しほ | ふかさわ しほ

2018年より額田大志主宰の〈ヌトミツ〉に所属し、以降のすべての作品に出演。俳優として、ゆうめい『《》』、玉田企画『かえるバード』、ニカサン『うまく落ちる練習』、スペースノットブランク『氷と冬』など、参加作品は多ジャンルに渡る。



横田 僚平 | よこた りょうへい

俳優。1987年生まれ。横浜を中心に活動するオフィスマウンテンのメンバー。2016年に岸田國士戯曲賞最終候補作品に選ばれた『ドッグマンノライフ』より継続的に参加。これまでの演劇出演は新聞家『屋上庭園』、ダダルズ『顔が出る』、円盤に乗る派『おはようクラブ』、サンプル『自慢の息子』、グループ野原『愛するとき死ぬとき』など。

レパトリーの創造について

ロームシアター京都が、2017年度から取り組んでいるプログラムで、劇場のレパトリー演目として時代を超えて未永く上演されることを念頭に、公立劇場として主体的に作品製作に取り組む事業です。また、作品創造のプロセスを通じて、俳優、ドラマツルク、制作者等の専門家人材の育成や観客育成のための関連プログラムを企画し、レパトリーの創造から各地域における劇場文化をつくることを目指します。

これまで、以下の3作品を製作しました。

木ノ下歌舞伎『心中天の網島—2017 リクリエーション版—』

作：近松門左衛門

監修・補綴：木ノ下裕一

演出・作詞・音楽：糸井幸之介（FUKAIPRODUCE 羽衣）

初演：2017年10月5日[木]—10月9日[月] ロームシアター京都 ノースホール

木ノ下歌舞伎『糸井版 摂州合邦辻』

作：菅専助、若竹笛躬

監修・補綴・上演台本：木ノ下裕一

上演台本・演出・音楽：糸井幸之介（FUKAIPRODUCE 羽衣）

初演：2019年2月10日[日]—2月11日[月・祝] ロームシアター京都 サウスホール

再演：

2019年2月15日[金]—16日[土] 穂の国とよはし芸術劇場PLAT

2019年3月14日[木]—17日[日] KAAT 神奈川芸術劇場

2020年10月22日[木]—26日[月] あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）

2020年11月2日[月]—3日[火・祝] ロームシアター京都 サウスホール

ジゼル・ヴィエンヌ、エティエンヌ・ビドー＝レイ『ショールームダミーズ #4』

演出・振付・舞台美術：ジゼル・ヴィエンヌ、エティエンヌ・ビドー＝レイ

初演：2020年2月8日[土]—2月9日[日] ロームシアター京都 サウスホール

ロームシアター京都開館5周年記念事業
レパトリーの創造

松田正隆 作・演出

『シーサイドタウン』

作・演出：松田正隆

出演：生実 慧、鈴鹿通儀、大門果央、
田辺泰信、深澤しほ、横田僚平

照明：藤原康弘

衣装：清川敦子（atm）

演出助手：福井裕孝

舞台監督：川村剛史（ロームシアター京都）

記録：村川拓也、米倉 伸

イラストレーション：カナヰフユキ

宣伝美術：南 琢也

撮影：中谷利明

制作：齋藤 啓・宮崎麻子（ロームシアター京都）

制作補助：黒木優花

[ロームシアター京都スタッフ]

舞台：大西貴士、島村弘之、船越美紀、石田昌也、
森本康志、井上達也、朝霧賢二

照明：柴田順、林いつみ、大塚咲季、亀井杏寿

音響：豊田英介

広報：松本花音、長野夏織

制作統括：小倉由佳子

プログラムディレクター：橋本裕介

企画製作：ロームシアター京都

主催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、
京都市

京都芸術センター制作支援事業

2021年1月27日[水]—31日[日]

27日[水] 18:00

28日[木] 18:00

29日[金] 18:00

30日[土] 14:00 | 18:00

31日[日] 14:00

ロームシアター京都 ノースホール

（京都市左京区岡崎最勝寺町13 TEL 075-771-6051）

